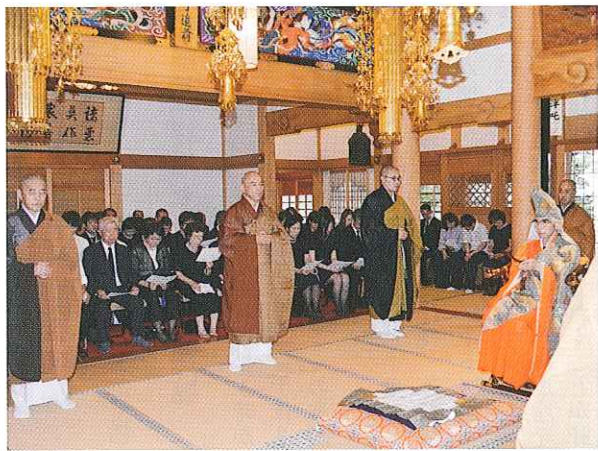


萬福寺の行事はどなたでも参加できます。



日 曜日と重なった今年の7月13日、正午から新盆会法要が、法話を挟んで午後2時から孟蘭盆会法要がしめやかに営まれました。この1年間にご家族やお身内を亡くされた方々は、仏様となった故人を初めてご先祖様と共に自宅に迎える新盆です。ご家族そろって礼服に身を包み、安本利正ご住職様式師のもと、ご焼香する姿が印象的でした。間を挟んで行われた法話でも北條和之老師様（茨城県笠間市・高寅寺ご住職）は、次のようにお盆の意義を話されました。

ご家族揃って
御先祖様をお迎えに

新盆法要と 孟蘭盆会の法要

平成26年7月13日(日)

大施餓鬼会法要
午後1時から法話、
2時から法要
京に梅雨明け宣言が出された翌日の7月23日、晴れ渡った夏空のもと大勢の参詣者が参列して大施餓鬼会法要が行われました。安本利正ご住職様を導師に、40名の住持、僧侶が「修証義」を読経しながら行列をつくって堂内

「お盆には、親類やお知り合いができれば4人以上集まって、故人をしのんで生前の思い出を語り合うことです。自分の知らない話や話を聞くこともあります。故人を思い出し、語り合い、好物をお供えすることは何よりの供養になります」南馬込の小林義郎さんはこの日、埼玉県の大宮からいらした妹さんお二人を伴って、ご両親のお墓参りに訪れていました。このあとご自宅で皆さんと食事をされるとのこと。きっと思い出話に花を咲かせたことでしょう。



小林さんご一家



北條和之老師



巡り歩く僧侶の皆様

本堂入口に設けられた施餓鬼棚

を巡り歩き、三界萬霊（ありとあらゆる霊）を供養しました。施餓鬼会では三界萬霊と餓鬼に施しを行い、萬有の霊力に感謝を捧げ、あわせて先祖を供養して、萬霊を供養している我々の姿を見てもらい安心していただくことが大切な行為です（安本ご住職様のお言葉）。御本尊様と向かい合って本堂入口に設けられた施餓鬼棚には、お米やナス、キュウリなどの季節の野菜、食べ物が供えられ、僧侶のご焼香のあと参加者全員がご焼香しました。法要に先立つ法話では、駒澤大学名誉教授・田上太秀老師様が「幸せな家庭を築く生き方」と題して、お釈迦様が説かれた4つの知恵「与えること」「やさしい言葉を語ること」「他を利すること」「協力すること」（仏教用語でいう「四摂法」）が大切というお話をされました。



田上太秀老師による法話



初めて参加された松本さん夫婦（6月21日）
心静かに筆を運ぶ参加者（11月15日）

次回（年明けの2月11日（水・祝））午後1時から。この日は今年度に皆様がお書きになった写経を奉納する納経諷経も執り行われます。お一人での参加も歓迎いたします。参加ご希望の方は直接ご来山ください（参加費1千円、懇親会費1千円、用紙・筆無料貸し出し）。

平成26年度「写経会」
無心になって
心落ち着くひとときを
萬福寺護持会研修委員会が開催する写経会が平成26年6月21日と11月15日の2回、客殿で開催されました。両日とも午後1時から約2時間かけて「般若心経」を手本に皆様、心静かに筆を運ばれていました。6月21日の写経会に初めてご夫婦で参加された東馬込の松本政次郎さんは、終了後の茶話会では汗を拭きながら、すがすがしい表情でお茶を飲んでおられました。

今なお癒えない悲惨な状況に圧倒され、 霊安らかなれと祈る ―石巻市松巖寺で―



正面に見えるのは穏やかな志津川湾。震災時には引き潮で湾内の底が見えたという（戸倉中学校）

翌8日午前中は南三陸町観光協会の語り部ガイド・佐藤正文さんが「南三陸さん商店街」（店を失った商店が集まった仮設の商店街）からバスに同乗、町を案内していただきました。佐藤さんは今回の震災で家を失い、ご両親、義弟（妹さんのご主人）を亡くされたそうです。消防団員だった弟さんのご遺体はまだ見つからないそうです。「皆様のお役に立てれば」との思いでガイドを引き受けられているとのこと。最初に向かったのが志津川湾を見下ろす高台に立つ「戸倉中学校」（現在は閉校）です。津波は海抜15メートルの校庭



戸倉中学校で語り部ガイドから説明を受ける一行（南三陸町）

まで達し、校舎の1階までのみ込んだものの、大半の生徒・住民は裏山へ駆け上がりかろうじて助かったそうですが、生徒1名、教職員1名が犠牲になりました。現在、校庭には仮設住宅が建てられ、被災者が生活しています。物見遊山と見られないよう、気を付けながら静かにバスを降りて語り部さんの後について校舎を一周しました。次に向かったのが、南三陸町防災対策庁舎です。若い女性職員が津波襲来直前まで防災無線で町民に避難を呼び掛け続け、自らは逃げ遅れて殉職したところでした。赤い骨組みだけが残されました。この悲劇が報道されて多くの視察者が訪れるようになり、記念写真を撮るなどしたため、女性職員のご両親が心を痛めていることを知った語り部の方たちは、バスから降りないでガイドをしているとのこと。一同、バスの中から黙祷しました。南三陸町からバスは一路、石巻市湊町の松巖寺へ。ご住職の永井祐道師が以前萬福寺に奉職されていたことが縁で、震災直後、お見舞金を持って竹内京三萬福



被災直後の本堂（平成23年4月）。津波は点線のところまで達した



現在の松巖寺本堂。地上から3m20cmぐらいの高さまで津波が押し寄せたという



松巖寺ご本尊様に手を合わせ、震災被害者のご冥福をお祈りしました。

寺務長が訪れたお寺です。永井住職様から地震後約30分して津波が押し寄せ、本堂の中央1メートル20センチの高さまで達した旨お聞きし、あらためて津波のすさまじさを実感しました。ここで同行の安本由道副住職様が「震災で亡くなったすべての諸精霊を供養したい」と永井住職様に申し出、ご理解を得て参加者からは「朝から悲惨な状況を見聞きし、涙が出てしかたがなかったが、ご焼香ができて気持ち少し楽になりました」との声がかれました。永井住職様から被災後に行われた護持



中尊寺「金色堂」前にて
（左上）バスガイドの阿部友美さん

会の支援に対しいちためてお礼が述べられ、一行は松巖寺の皆様のお見送りを受けて帰路につきました。自身も被災者でありながら暗くなりながら研修をバス移動のひとときだけでも楽しくと精一杯ご配慮いただいたバスガイドの阿部友美さん、ありがとうございました。天気にも恵まれ、事故もなく全員無事に研修を終えることができました。皆様のお陰と感謝いたします。まだまだ復興には時間がかかりそうです。この悲惨な体験を風化させず、被災現場を正しい目で見て感じたことを、これからも伝えていきたいと思っています。